

RISTでの活動を振り返って

RIST幹事
(株)電盛社 常務取締役
富松 篤典



RISTへ入会したのはちょうど16年前の2003年春でした。その後、2007年に初めて技術検討会のメンバーとしてソフトウェア工学技術検討会の活動へ参加しました。このあたりから企画委員も担当させて頂きました。

この時間は、RISTの30年という長い歴史に比べれば、その半分程度ではありますが、ずいぶんと長く感じるのは、この10数年だけでも技術や市場の変化が激動の時代であったことも一つの要因かもしれません。

振り返って見ますと、世界初のAndroidのスマートフォンが発売が2008年、GAFAのamazonの当時の売上は現在の10分の1にも満たず、Googleの売上は現在の6~7分の1、またfacebookの売上は200億円も無く、日本語化は2008年でした。

弊社の入会のきっかけは、当時、企画委員長をされておられた汐月先生にRISTにソフトウェアの要素をもっと加えて欲しいと声をかけて頂いたことからです。

そこから、RIST会員の多くの方々とお話し、さまざまな活動へ携わることになりましたが、加入前には予想しなかった視野の広がり、交流する人脈の広がりが生まれました。

企画委員会で議論しながら(同時に学びながら)、熊本県内にこういった分野の知識や理解を広げ深めるのがよいのではと、RIST内外の方と協力を頂きながら、数多くの方を熊本にお招き(巻き込み?)しました。お招きした多くの方と今も親しくさせて頂き、またその方々やその機会を通じた交流も生まれ、ソフトウェアの世界に限らない視野を得られたことは感謝に堪えません。

自分なりに考えてみますとこうした広がりを生むことは、RISTの大きな特徴かもしれません。RISTの活動や企画委員会、幹事会での議論から感じるのは、枠の中での活動ではなく、「RISTが持っているポテンシャルから何が出来るか」という広がりを持った考え方です。

RISTという存在は、ひとつの組織である以上にひとつの文化ではないか、そしてそれは、代々の会長の先見性、高い能力とお人柄、支援して頂いている方々の理解、幹事・企画委員の皆様への地域へ貢献する気持ちに支えられて引き継がれて来たのではないかと思います。

RISTの30年の中で、20周年と30周年の記念事業に関わらせて頂き、RISTの歴史を振り返る機会に恵まれましたが、第1回から第5回のRISTシンポジウムでのパネルディスカッションのテーマを並べますと、「どう結ぶ、知能システムと地域企業」「どう活かす、地域企業での知能システム」「知能システム技術の定着をめざして」「システム化・知能化による生産向上戦略」「地域産業における知能化・ロボット化戦略」と、現在開催してもおかしくないテーマになっております。早すぎたのでは?という見方も出来ますが、当時から参加されている企業は、先見を持ちつつ、その時点、もしくは近い将来で実現出来ることへ取り組まれ、大きな成果へ繋げて来られたように感じます。

これまでの30年の変化は、これからは10年もあれば十分な時代になりました。

RISTの存在の意味と価値は、ますます高まっていると感じます。